

## 国語 (B日程)

(解答はすべて解答用紙に記入しなさい)

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

別に高校生や大学生の皆さんに「将来のことは考えなくてもいい」とか「適当にやれ」などと言いたいのではありません。一代で進路を定めるのは難しいし、その段階ではいろいろなことが分からなくて当たり前だと思います。だから悩みますね。でも、悩んでいても、生活の中では悩みなどお構いなしに短期的な課題が次々に到来します。定期テストの勉強をしなければならぬし、受験に備えた勉強もしないといけない。部活動などでも次々にやることかでてくる。

将来のことに悩むと、そういった短期的な課題に身が入らないことがあると思います。僕がよく学生に言っているのは、とりあえずまずは目の前にある短期的な課題に一生懸命に取り組みなさいということ。将来のことは不安です。不安ですけれども、だからといって定期試験の勉強をしないのはよくない。明日の学校の授業に真面目に取り組みないのもよくない。

その上で、自分の人生においてもすごく遠くにあること、将来についてのものすごく漠然としたことを、何となくでいいので考えておいた方がいい。曖昧でよいのです。「世の中をよくしたい」とか、「何でもいいから大発見をしたい」とか、「人間とは何かを考えたい」とか、具体的には何を指しているのかがよく分からないことでもいいから、自分の中にあるボンヤリとした関心事、すごく遠くにあることを大切にする。

A、ものすごく近くにある課題ともものすごく遠くにある関心事の両方を大事にする。なぜこんな話をするのかというと、その間にある中間的な領域のことはなかなか思い通りにならないんですね。どんな大学に行きたいとか、どんな会社に行きたいとか、そういったことはなかなか思い通りにはなりません。ですからそこに目標を置いてしまうととても苦しいことになる。でも、来週の定期試験の勉強はできますよね。また、「何でもいいんだけど、何か世の中をよくすることをしたいな」とかボンヤリ考えることもできます。

短期的な課題を一つ一つこなしていくと、課題で求められていたこと以上の何かが身につきます。人の話の聞き方だったり、自分の特性についての理解だったり、休みの取り方だったり、友だちとの情報共有の仕方だったり、失敗の受け止め方だったり、仕事の順番の決め方だったり、短期的な課題はたくさんあることを教えてくれる。その上で、遠くにある自分にとっての大切なことをボンヤリとも思い描いていたら、人生におけるプレを不必要に大きくしないで済むように思います。先ほど言った、中間的な領域での思い通りにならないことによって必要以上に振り回されずに済む。

僕自身もそうだったように思うんです。僕にとつての、ものすごく遠くにある大切なものというのは、「3」みたいなことだったと思います。こんなにボンヤリしているわけですから、それがどういう形で具体化できるのかはよく分からなかった。結局、哲学という分野に落ち着いたわけですから、「哲学をやる」なんていう明確なイメージは若い頃にあつたわけじゃない。哲学という領域は広大ですけれども、僕にとってはそれですら中間的な領域だったんですね。様々な事情でそれが決まっていた。で、それが決まってくまでの間、一応、目の前の短期的な課題の一つ一つには一生懸命取り組んでいた。その結果として哲学の研究者になったという次第です。

では僕が研究している哲学なる領域の勉強をすることにはどんな意味があるのか。これについてはいろいろなことを言えるのですが、一つ、最近よく思う点をあげてみたいと思います。哲学というものを勉強すると、世の中に溢れている紋切り型の考え方から距離を取れる——僕はそんな風に考えています。

世の中には或る問題、論点についてのパターン化された答えが溢れかえっています。それらはだいたいですが、賛成ならこう、反対ならこうという形を取っています。賛成と反対でパターンが決まっているわけですから、もうそれ以上話が進みません。どちらかがどちらかを何らかの仕方で圧倒して否定するしかその問題への解決はなくなる。今だと「テンプレ」なんて言葉もあります。ある事柄について意見を形成しようとする時、まず賛成か反対かを決めなければいけなくて、そして賛成にも反対にもテンプレが用意されているから、そのテンプレのどちらかに身を置くことになってしまう。

でもそこで問題になってくることについてよく調べて考えてみると、テンプレが見落としている論点が見えてくることがあります。そしてその論点に注目することによって、テンプレ上の対立が無効化されることがよくあります。あるいは、テンプレに留まっていたならば考えることのできなかつた問題が見えてくる。

そういう風にしてテンプレに留まることなく考えを進めていけるようになることこそ、哲学を勉強することの意味の一つだと僕は思っているんです。なぜならば、哲学というのは基本的に問いを立てて、その問いに概念をもって答える営みだからです。

あらかじめ用意された問い——この事柄について賛成か反対か——をただ受け取り、あらかじめ用意されたテンプレに身を置かざるを得ないのは、自分なりにその事柄について問いを立てるといった営みが省かれているからです。哲学の勉強をすれば、問いを

立てて、概念をもってそれに取り組む訓練ができますし、哲学の勉強にはそのような訓練が含まれていなければなりません。そもそも歴史上の哲学者たちは、誰でも、何らかの問いを立て、それに自らの概念をもって取り組んだ人たちなのです。

たとえば「カントという哲学者がこういうことを言った」という知識を蓄えることは大切ですが、それはかつて存在し、またそれに対する取り組みが行われた問いを、一つの重要な例として知ることだからです。

B、そこから進んで、いま自分をあるいは自分たちを悩ませている事柄について問いを立てるといこともできるようにならない。そもそもそれに悩まされているのなら、それをどうにかしないとイケないわけですから。そのための訓練を哲学は提供してくれるし、提供しなければなりません。僕はそのような訓練——しばしば修行と呼んでいるのですが——これこそ哲学を勉強する上で非常に大切なことだと思っています。知識をインプットするのももちろん欠かせない。けれども、それだけでなく、そうした訓練や修行を、哲学の勉強を通じて行って欲しいと思っています。

(出典 國分功一郎「目的への抵抗 シリーズ哲学講話」新潮新書による)

注1 紋切り型——ものごとのやり方が一定の型にはまっていること。

問一 〰〰〰線 a 「大発見」は「大+発見」という組み立てになっています。これと同じ組み立ての三字熟語を次の中から選び、

記号で答えなさい。

- ア 優等生    イ 動物園    ウ 特效薬    エ 雪月花    オ 雨模様
- 問二    A・Bに入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
- ア A 〰つまり    B 〰けれども  
イ A 〰だから    B 〰もし  
ウ A 〰さらに    B 〰だから  
エ A 〰しかし    B 〰それでも  
オ A 〰たとえば    B 〰あるいは

問三 〰️線 b 「身を置く」とありますが、同じように □ に「身」という語が入ることわざを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア □ から出た鋪うら
- イ 泣きつ □ に蜂はち
- ウ 飼犬に □ をかまれる
- エ 馬の □ に念仏
- オ 後ろ □ をさされる

問四 〰️線 1 「自分の中にあるボンヤリとした関心事、すごく速くあることを大切にする」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 進路を気にしてあせることなく、ゆとりをもって今の生活を楽しむことができるから。
- イ 思い通りにならないことに振り回されず、人生のブレを少なくすることができるから。
- ウ 短期的な課題にとらわれず、将来のために何が必要かを見極めることができるから。
- エ 親や先生の意見に振り回されることなく、信念をもって生きることができるから。
- オ 将来の夢がはつきりとして、目標に向かって具体的な計画をたてることができるから。

問五 〰️線 2 「課題で求められていたこと以上の何か」の内容としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 友人と情報を共有する方法
- イ 自分自身の特性に対する理解
- ウ 効率よく仕事をこなす方法
- エ テストで出題される単元の知識
- オ 失敗を受け止めるための方法

問六 □ 3 に入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 有名な大学に進学したい
- イ 学校のテストで満点をとりたい
- ウ ものこを本質的に考えたい
- エ 哲学の研究者になりたい
- オ 集中して授業に取り組みたい

問七 〰️線 4 「僕が研究している哲学なる領域の勉強をすることにはどんな意味があるのか」とありますが、筆者は哲学を学ぶことにどんな意味があると述べていますか。「〰️」という意味。」に続く形で本文中から二十六字で抜き出し、最初と最後の五字をそれぞれ書きなさい。(句読点等記号も一字に数える。後の問いも同じ。)

問八 〰️線 5 「そのような訓練」とありますが、どのような訓練ですか。五十文字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今日の練習を終えて、みんなが続々とBar HAJIMEを後にする中、わたしはカバンの中身を無意味に整理しながら時間をつぶした。何を察してか、優里も先に帰っていった。

「帰らないの？」

ピアノのイスに腰を下ろした朔くんが聞いてくる。

「いや、朔くんと二人で話すタイムिंगをうかがってただよ」

「昨日のこと？」

「それ以外に何かあると思う？」

ピアノに歩み寄って、一言「ごめん」と朔くんに謝った。言葉は意外とすんなり出てきてくれた。

朔くんは、昨日と同じように、きれいな瞳をわたしに向けている。パールのオレンジ色の光を吸いこんで、目の奥がほかに金色を帯びている。

「朔くんの言ってた通りなんだよ。わたしたち、コンクールで金賞を取るために、つらい思いをするだけのクラブになってる。わたしは心の中で、楽しくやるつてことを、頑張らなくていいつてことだと思つてた。部長の穂乃花がやつてることを、まちがつても思うし、**A** 全否定もできないし……根っこでは穂乃花と同じつていうのも、朔くんの言つた通り」

「でも、優里には『言はずだよ！』つて言われたし、南先生には『自分の言つてることが正しいからつて、それを人をぶん殴る道具にしちやダメだよ』つて怒られたよ。だから、朔ちゃんもちよつと反省してる」

わずかに **B** をハの字にして、朔くんも「ごめんね、真子ちゃん」と謝つてくる。

「いや、別に朔くんは正しさでぶん殴つてはいないよ。わたしの凶星を指したただだよ」

凶星だから、朔くんの言葉が痛くて、とっさにふり払つてしまった。

朔くんつて、どうしてそんな風に、思つてることをきれいに言葉にできるの？」

思わず、聞いてしまった。

「えー？」と困つた顔をした朔くんだったけれど、わたしの顔を見て、すぐに頬を引き締めた。

わたしはそんなに、怖い顔をしていたんだろうか。

「半地下合唱団のおかけかも」

「……どうのこと？」

「年の近い子と話すのはもちろん楽しいけど、それだけじゃわからないことを教えてくれる人が、ここにはいっぱいいるからね。

立花さんとか特にそうだし、藤野先輩も、奈津実ちゃんも亜矢ちゃんも。普段はあんなだけど、魚住のおっちゃんも」

「それは、ちよつとわかる」

学校の友だちとは絶対に話さないこと、教えてもらえないことが、ここにはたくさんある。子どもではわからないこと、想像できないこと。年齢関係なく、その人しか言えないこと、見えないこと。

「学校の外じゃないとわからないことつて、結構あるんだなつて思う」

言つてから、この前、朔くんのお母さんが、「学校の仲間ときびしい練習を乗り越えるつていうのも、楽しいと思うんだけどね」と、苦笑いしていたのを思い出した。

学校の中にしかないもの、学校じゃないと手に入らないものも、たくさんあるのかもしれない。ずっと学校にいと、当たり前すぎて気がつけないだけで。

「朔くんのこと、少しわかつた気がするよ」

「そう？」

「ちよつとだけね」

朔くんが、学校を自分のボーイ・ソプラノを披露する場所じゃないと考えていることと、その理由は、よくわかつた。

「最初は、なんで半地下合唱団では歌うのに、学校で歌わないんだらうつて思つてただけど、朔くんは半地下合唱団だから歌つてるんだよね。朔くんが合唱クラブに入つたら、きつと窮屈な思いをするだらうなつて思うし。それに、音楽の授業で朔くんが本気で歌つたら、やっぱりクラスの子にからかわれて嫌な思いをしそうだなつて思う」

「わかる。朔ちゃんもそう思う」

ふふつと笑つた朔くんが、「瞬だけ、遠くをながめるような目をした。

そのまま、ゆつくり、わたしを見る。

「俺がソプラノをからかわれて友だちとケンカしたことがあるって、母さんから聞いたでしょ？」

「……うん、聞いた」

「ペラペラしゃべりすぎなんだよ、母さんは」

笑い声とため息の真ん中のような吐息をついて、朔くんは **C** をすくめた。

「別に、絶交したとか、今も仲が悪いとか、そんな深刻な話じゃないんだよ。でも、俺は俺の歌声が気に入ってるから、気にしちゃうってだけ。自分でもびつくりするくらいシヨックだったんだよ、からかわれたの」

大事なものだから、ささやかなことでも大きな傷になってしまう。そう言いたげにほえんだ朔くんは、わたしは小さくうなずいた。

わたしも、例えば……誰かから「あなたにラベンダー色は似合わないね」と言われたら、それがどんなに軽い言い方でも、何気ない冗談でも、やっぱり傷つくと思うから。

でも同時に、学校が、朔くんがのびのびと歌を歌える場所だったらよかつたのに、とも思う。英語の発音が上手だったり、授業中に一生懸命手を挙げたりする子を——好きなことを頑張っている子を、馬鹿にして笑ったりしない場所なら、いいのに。

「まあ、あとはただ単純に、ここで歌うのが楽しいんだけどね。いろんな人とゲラゲラ笑いながら歌うの、楽しいもん」

朔くんがアップライトピアノの上におかれた布に手をのばす。魚住さんが思う存分に弾いた鍵盤を、やわらかい布で優しくふいた。

「彼方の光、歌ってくれないかな」

気がついたらそんなことを口走っていた。手を止めた朔くんは、一瞬だけわたしを見上げて、すぐに「いいよ」と笑った。

(出典 額賀澤「ラベンダーとソプラノ」岩崎書店による)

60

問一

**A**

Aに入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ぜひ    イ だから    ウ たとえば    エ たぶん    オ でも

問二

**B・C**

B・Cに入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア B Ⅱ口    C Ⅱ胸  
イ B Ⅱ目    C Ⅱ顔  
ウ B Ⅱ眉    C Ⅱ肩  
エ B Ⅱ腕    C Ⅱ鼻  
オ B Ⅱ耳    C Ⅱ手

問三

線 a 「凶星を指した」の本文中の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 出方を見た  
イ 注意を引いた  
ウ 努力を無駄にした  
エ 弱点をついた  
オ 気持ちを見無視した

問四

線 ①④ 「ない」のうち文法的な用法が他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問五

線 1 「朔くんの言ってた通りなんだよ」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア クラブがつらい思いをするだけの場になっていて、真子と穂乃花の考えが根本的には同じだということ。  
イ コンクールで金賞をとることなど不可能だが、クラブがそれを目標にしてしまっているということ。  
ウ 真子も穂乃花も、楽しくやることを頑張らなくてもいいことであると考えてしまっているということ。  
エ 学校でソプラノで歌うと、友達にからかわれていやな思いをすることになってしまおうということ。  
オ 「半地下合唱団」で様々な年齢の人と歌うのは、学校のクラブや授業で歌うよりも楽しいということ。

61

問六 — 線2「朔くんって、どうしてそんな風に、思ってることをきれいに言葉にできるの？」とありますが、これについて朔はどう考えていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「半地下合唱団」の仲間たちが、自分の気持ちを素直に話す方法をわかりやすく教えてくれたから。

イ 「半地下合唱団」で学校の同年代の人達とは違った人と話すことで学べるものがたくさんあるから。

ウ ベラベラとよくしゃべるお母さんの影響を受けて、思ったことを口にするのが平気になったから。

エ 学校ではソブラノの歌声を友達にからかわれるが、「半地下合唱団」では歌声を認められているから。

オ 学校で優里や南先生に昨日のことをしかられてしまったので、真子に会ったら謝ろうと思っていたから。

問七 — 線3「その理由」だと真子が考えている内容を説明した箇所を連続する二文で本文中から抜き出し、最初の五字を答えなさい。(句読点等記号も一字に数える。)

問八 — 線4「わたしは小さくうなずいた」とありますが、なぜですか。六十字以内で説明しなさい。

### Ⅲ 次の各問いに答えなさい。

問一 次の — 線部のカタカナを漢字に直しなさい。

① イバラキ県を電車で訪ねた。

② フデバコの落とし物があります。

③ 彼は勇氣をフルい起こした。

④ 結論に至るまでのカテイを確認する。

⑤ シユエイが校門を閉めた。

問二 次の — 線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

① 理科の実験で磁場を作る。

② 完熟トマトを手に入れた。

③ 小さな声でおまじないを唱えた。

④ 子どもはすぐに新しいものに順応する。

⑤ 体育の授業で側転を習った。

|    |    |    |
|----|----|----|
| 一  |    |    |
| 問一 | 問三 | 問五 |
| 問二 | 問四 | 問六 |
| 七  |    |    |
| 八  |    |    |

という意味。

|    |    |    |
|----|----|----|
| 二  |    |    |
| 問一 | 問三 | 問五 |
| 問二 | 問四 | 問六 |
| 七  |    |    |
| 八  |    |    |

|    |   |    |   |
|----|---|----|---|
| 三  |   |    |   |
| 問一 |   | 問二 |   |
| ④  | ① | ④  | ① |
| ⑤  | ② | ⑤  | ② |
| ③  |   | ③  |   |

↓ここにシールを貼ってください↓



2413100